

# ユートピア

## 子どもの“その”



清水 さよ子

幼稚園、保育園、どちらにもついている「園」という字。その“にわ”美しいひびきをもつ字である。植物園、動物園、ともに園という字が書かれている。何か共通したものがあのように感じる。

自然物と生きもの。あいらしさとたくましさ。そこには人の心をなごやかにしてくれる素直さがあふれている。

現在の幼稚園、保育園、いや社会の中にいる子どもたちが、みなめぐまれた環境にいるとはいえない。むしろ公害、交通戦争、遊び場の縮少とだんだんおいやられていくようなやりきれない気持になる。

植物園と動物園とをいっしょにしたような子どもの“その”があったらどんなにいいだろう。四季の花、木の葉

のトンネル、土の香りに土の山、いっしょに遊ぶうさぎやあひる、そして思いきり走りまわれる広い庭、草の原っぱでごろごろころがる子どもたち。次から次へと夢ははてしない。

めぐまれた環境がいかに大切かはいうまでもないが、目の前にいる私たちの園児ひとりひとりの心の中にも、美しい心の“その”があるのではないだろうか。

心の中に小さな小さなたねがまかれ、日がてり、雨がふり、風がふいて成長していく。時にはひでりにみまわれ、強い風や強い雨、そのようなことにもめげず成長していくたくましさ。

幼い心の中は好奇心でいっぱい、どこを向いても幼い心は躍動するだろう。つかれをしらない幼い心、失敗し、迷

い、何でもやってみる、何度でもやってみる幼い心。

幼い心の芽はやわらかく育っていく。

私はもう二十年近くも前からの友といっしょによく郊外にでかける。目的は何百年か前の古い昔をさぐりながら、お寺や庭、そこにたてられた石の仏などを見て歩く。

山に魅せられて山を歩く人、海にひかれて船にのる人、自然の雄大さにひかれることはもちろんだが、そこにたっているもろもろの美しさにまた目をひかれる。

一本の柱がかけても平均をうしなうような美しさ、やねの反さかの流れるような線、五輪塔のはちきれそうな丸み、形よくふくらんだ宝珠、均整のとれた塔など、どれをみても目をうばわれる

ものは多い。

それらの美しさの中の何にひかれるのだろう。豊かさ、あたたかさ、おだやかさ、その中にひきしまった心がある。きびしい心がある。

柔軟な幼いこどもたちの心も成長とともにきびしさをもってほしい。

現在の環境を急に作りかえることはできない。こどものくにや自然遊歩道、また自然を保護する運動や自然をとりもどす動きもはじめられている。私達も幼稚園のよりよい環境に努力することはもちろんだが、現在の環境を生かしてよりよい教育をと努力している。

そして柔軟な、好奇心のかたまりのような幼い心に対応していけるおとなの心をもとうと努力している。固まってしまった心には、一方的にしかもの

が見られなくなり、好奇心も失い、美しさも感じる余裕がなくなってしまう。固まった心では幼児の伸びようとする心の芽をつんでしまう。

夢のような環境の中でも、現在の環境の中でも、幼い心をくみとり、育てるおとなの心のあるところに、本当のこどものしあわせの“その”がまっている。

(目黒区立月光原幼稚園)

